

の受影でした。
本城さんは

市制施行八十五周年記念式典で環
境美化の市政功労者として表彰を
成人を祝うつどいを市民会館で開

会教育事業団(米原稜会長)が新
成人を祝うつどいを市民会館で開

の跡は地区の誇りだ。

の跡は地区の誇りだ。

西吉成水防センター 町内会が自費で建設

住民自らの手で浸水などの災害から身を守ろう、と西吉成町内会(森場安男会長)が地区内に西吉成水防センターを建設、昨年十二月二十四日に完成式を行いました。

西吉成地区は大

川と清水川にはさまれ、大雨のときには浸水騒ぎがたびたび起こる「浸水常習地域」で、五十一年九月には、台風17号により町内の百三十五戸のうち百五戸が床上浸水、五戸が床下浸水という被害を受けています。被害を受けた住民は近くの市民体育館に避難、不衛生な生活強いられました。

正月の町内会総会で出され、八月に正式に決定、建設委員会(大江正義委員長)が本格的に建設準備に取り掛かり、十月初めに着工しました。建設用地は八月いっぱい閉鎖された共同浴場跡地(市有地)三百八十三平方メートル、市から借りたもの。約六十坪地上げしており、浸水には万全の措置をとっています。建物は木造平屋建てで、

広さは七十平方メートル。カーペット敷き三十畳大の避難室をはじめ、炊事場、洗面所などが設けられています。また、六平方メートルの倉庫も併設、自警団の消防器材を収めており、土のうも備える計画もあります。

また、放送機器も備え付け、屋外の電柱(七基)に出力五十ワットのスピーカー二個を取り付け、緊急の連絡事項などを町内全域に流すことができる年齢にはなっている。しかし、どんなに時間がかかってもいい、少しでもわかっていたら人をつくりたい。会社の上司や町長、教育長に彼の家族や親類の説得をお願いした。しかし、その方々の助言も説得も耳に入らなかったのだらうと思う。時間をかけて頼めばわかってももらえるのだらう、という私たちの考えは甘かった。いろいろな方法で説得を試みて一年半も過ぎた。結局、肉親には五人しかわかっていただけで、結婚式の参加も二人だったが、私たちはとてもうれしかった。がんばったかいがあった。

同和問題 シリーズ

22



中島 道江

部落差別のあることを不思議に思った小学校時代、悲しく寂しかった学生時代、苦しかった青春。そして、今も私たちはこの差別に打ち勝っていかなければならない。

わたしの結婚

高校を卒業し、ある会社に入った。同じ会社の男性との交際が始まった。二人の気持がだんだん高まるにつれて、私はとても不安な気持ちになっていった。このままではだめだ、一思いに部落のことを彼に話さなくては、きょうこそは、きょうは、と思いがけなかなか勇氣が出ない。後に泣いて泣くよりは絶対に今話さなければならぬ。

怒りの涙を流す 願いは心の通い合う社会

少しの間だったが、部落解放同盟青年部に入って勉強をするなかで、彼といろいろ話し合った。彼は、「初めから知っていた。そんなことで人間を判断するものではない。人の心と心のつながり、友情、愛情がそんな差別によって簡単にこわされるものではないはずだ」という返事が返って来た。張りだ」と深々と頭を下げられた。

そのころから私の結婚は考えていたようだ。しかし、いざ結婚となると二人だけの問題ではない。スムーズに事が運ぶとは考えていなかったものの、あまりにもショックなことがばかり続いた。「反対だ! やめてくれ! この土地から離れてくれ! この通

婚できる年齢にはなっている。しかし、どんなに時間がかかってもいい、少しでもわかっていたら人をつくりたい。会社の上司や町長、教育長に彼の家族や親類の説得をお願いした。しかし、その方々の助言も説得も耳に入らなかったのだらうと思う。時間をかけて頼めばわかってももらえるのだらう、という私たちの考えは甘かった。いろいろな方法で説得を試みて一年半も過ぎた。結局、肉親には五人しかわかっていただけで、結婚式の参加も二人だったが、私たちはとてもうれしかった。がんばったかいがあった。

い世に変えたいものだ。地区活動に、PTA活動に、解放同盟支部活動に、また、スポーツを通して人と人とのつながりをと、微力ながら一生懸命やっている主人は、この村に来てよかった、自分自身もほんとうに強くなった、と言う。そして、村が少しずつ良くなっていく様子を見てとても喜んでいく。体験した者でないと、これらの苦しき喜びは絶対と違っていいくらいわからないと思う。私たちのように差別をされてきた者も、差別する立場にいた者も、お互いにつらい人生を送るときもある。自分の時代にはよくても、次の、また次の世代にはどうなるのかわからない。人のためにしてやるといふのではなく、自分のこととして考え、明日の世代に育つ子供たちが平等に話し合い、心の通い合う、明るい社会が築かれることを願っている。

りつめていた体の力が抜けたようだった。話すことができたということだけでとても気持ちがすっきりした。

四十四年七月、豊岡市で開催された部落解放同盟全国青年集會に参加した彼は、部落問題に耳を傾けた。彼が部落問題をどう理解していたのかはよくわからないが、

同じ人間に生まれて、この時ほどつらい思いをしたことはない。親兄弟、親類のことまでも私たちの責任にしようとする。部落の人と結ばれることをこの世にないほどの恥だと思っているのだ。毎日怒りの涙が続いた。

結婚するのは簡単だ。もうだれも許可ももらわなくても自由に結ばれない、一日も早く差別のな

(下味野、会社員、31歳)